

話しのうちにオノマトベについてひと通りの知識をもつことができた。

君の話す声はどちらかというと、低くて少し不鮮明なところがあった。これは私が難聴であるせいだったかもしれないが、雑談の際には、しばしば、聞きなおすことがあった。ところが、ことオノマトベのことになると俄然、声高になって姿勢も正して滔々と語る。聞きかえす必要は全くなかった。平素の眼鏡の奥のいくらか柔和な目が光を増してくる。舌なめずりをしながら話す。なつかしい顔だ。

君はいわゆるガリガリで一見健康には見えなかった。何度か一緒に旅行をしたことがあったが、温泉の湯槽のなかの君の胸は洗濯板のようだった。平素のあのエネルギーッシュなものがあるのかと疑われた。しかし、君は健康で、野球などもたしなんでいた。その結果なのだろう。野球部長という、今から言えば忌しい職についてしまった。野球部長になってしばらくして、君は少し陽にやけた元気な顔をみせたことがあった。「えらい肥えたね。野球ばかり

してるさかいやな」と言った。君は「ぎついこと言やはる。勉強してへん訳でもないのやけど……」と苦笑して言った。私は別に、とがめるつもりはなく、むしろ健康美を賞するつもりだったので、少々弁解したことがあった。実際、研究には健康が必要である。私など常に健康に危機を感じているので、君の健康そうな顔つきに祝福したい気持だったのである。君はなかなか野球部長はやめなかったが、研究の方も怠らざうとう出版にまでこぎつけた。

研究は出版で一応完成する。出版は研究

小嶋孝三郎先生の追憶

「えっ！ 小嶋先生が交通事故で!! 今、浜田病院に、(容態は?)……外傷はないが、内出血のおそれがある?!」所用で事務室のドアをあけたとたんに、電話応待者の復唱が、耳に突き刺さるように飛び込んできた。愕然として、私はその場に佇立してしまった。全身の血がすーっとひいていくよ

者の生がいである。君はどれだけその著書の出るのを待っていたか。その書物を見ずに逝ってしまった君の心情を思うとたまらなくなる。奥さんやお子さんの気持もいかにばかりかと思う。しかし、いま君の師の手で後記も書かれ、立派な書物になった。そして、店頭にも、また研究室や図書館の書架にちゃんと並んでいる。あの世から君はそれを見て喜んでるに違いない。君の霊の安らかならんことを祈るばかりである。

(四八・一・一二)

山崎利雄

うに感じられた。「……四時二十分頃、御園橋の西で……クリーニング屋の普通乗用車が、ニュートンしようとして、接触……、小嶋先生はバイクから飛ばされて、転倒……、コンクリートの溝蓋の角で、頭を強く打っているらしい?!」それは、新学期が始まって間もない四月十二日、硬式野球部の

顧問として、練習監督のため、柘野球場に向かわれた途上での、不慮の事故であった。十三日正午頃の報告によって、予断を許さない緊張した中にも、小康状態ということで、ややほっとした雰囲気が校内に甦った。が、「痛みを激しく訴え始めた。」という憂慮すべき事態に陥った。そして、手術、間もなく危篤の診断に変わった。容態の悪化は居残った教職員のねがいを容赦なく打ち砕き、ますます暗いものにした。異常に静まりかえった部屋の中の沈痛な顔と顔、しかし、誰の胸の中でも祈りが続けられていた。生死の境で闘っておられる先生を想った。握りしめた拳が震えた。その瞬間、電話のけたたましいベルの音、受話器を取ることのおそろしさ、遂に逝去の知らせ、午後十一時十五分、病名は脳剝削、頭蓋骨骨折。拳のやり場がなかった。悪夢のような三十時間であった。信じられなかった。全く信じられなかった。

廃さえ問われる危急存亡の時であった。そこへ累積赤字が追い打ちをかけた。部の再建は、自ら課された至上命令でもあった。筆舌に尽せぬ努力の結果、前者は漸次回復し、逆に倍増した。そこには誠心誠意、愛情のこもった指導が根底にあったのことであった。放課後に集中しやす日々、校務も、避けえない対外試合を除いては、必ず果たされた。責任感の旺盛な先生は、寒暑をいとわず、薄暗くなっても、しぐれても、球場に必ず出かけられた。これからですかとお尋ねすると、先生はいつもぎまづいて「生徒が待っているんだよ。」と満面に笑みを浮かべられておっしゃるのであった。そうした先生を何度見送ったことか！公休日には定期試験直前の一週間だけで日曜日も球場へ。また、担当された生徒への学習・生活指導にも、実にきめ細かく、親身で当たられた。先生と私の机は同じ教務部の中に置かれていたので、それと知れた。教室での現場指導も徹底しており、学殖豊かな授業内容は、定評のあるところで、学校葬での生徒代表者の弔辞にもそれが述べら

れていた。大学で先生の講読を受講したある学生は、推論と論証に学究的態度の厳しさと偉大さを痛感させられたと述懐していた。読書・作文指導にも力を注がれた。定時制時代に取り組ませた『金閣寺』（三島由起夫）の読書会の模様など、その都度逐一説明してくださったこともあった。読書・修学旅行等の感想文もまめに編集され、多忙な中からどうしてそれができるのかと、先生からすれば愚にもつかない疑問をもった。真摯な教育者としての情熱と誠意が、それをなしていたのであった。教材研究や生徒作品の審査の際に、朗々と先生独特の声調で音読されることがしばしばあった。それは傍で仕事をしていても全く苦にならないから不思議であった。詩人としての資質を持っておられた点と深いつながりがあるのであろうか。音読をしなくなっている一般的状況に対しても、常に身をもって範を示し、その心を伝えられた先生の愛情と熱意のこもった指導が行なわれていた。そうした先生は生徒から敬愛の念をもって慕われた。「北大路七不思議」といわれる一

つに「小嶋教」というのがあると聞いたことがあつたが、それこそこの先生の全人格から滲み出る魅力のゆえではなかつたかと理解している。先日、卒業生のひとり、きょうは先生と大いに論争したいとお宅を東京から訪れ、逝去を知らされ、声をあげて泣き悲しんだという。

〔前略〕

亀はいつも

余り見えもしない小さな眼で

どこか遠いところを

見つめていた

その暗い冷たい世界から

どうすれば脱出出来るか

そのためには

どうしなければならぬかを

彼はいつも

考え続けていた

いくら考えても

いくらもがいて

それは容易ではなかつた

五月雨で水嵩が増した日も

紅葉がいっぱい水面に降りしきつた日も

同じように考え続けた
考えるだけでなく 実行した

(中略)

だが― ある朝

亀は動かなくなつた

あんなにもがき続け

あんなに粘り強く努めた亀が

動かなくなつていた

亀は

陽のあたらぬ池で死んでいた

両手をだらりと垂らしたまま

意外に長かつた肢―

痺せた尾が力なく伸び

ある澄んだ眼を

永遠に閉じて

死んでいた

亀は

自分のふるさとに

帰れなかつた

だが 亀の魂はいつまでも

ふるさとの友の

心の中に生きていた

これは『亀の死』と題する遺作の一部で

あり、学校葬において、橋本二三男氏によって朗読された詩である。それぞれの解釈があるにせよ、この作品が訴えるように語りかけてくるものは一つである。それに私たちは先生の尊い生涯を拜するのである。

「今年こそは!!」と野球部の活躍に期待をかけられた先生、一昨年から研究業績の上梓を目途に、その準備を進められた先生、その成果と完成をご覧ならず急逝された先生。皮肉なる運命というにはあまりにも悲しく、かえすがえすも痛恨の情に堪えない。

小嶋先生の逝去は、立命館学園にとつて実に大きな損失であるといわざるをえない。本会もまた然り。なかんずく中学校・高等学校部門の北大路学舎では惜しむにあまりある痛手であつた。国語科としても、高等学校教務部としても、硬式野球部としても、文字どおりのかけがえのない大黒柱を失つてしまった。先生が示された教育実践の一端なりと受け継いで実行に移し、ひたすら先生の御冥福を心からお祈りするばかりである。